

患者を生きる

3935

職場で

大阪府豊中市の社会科講師、木下優里さん(37)は不妊治療を経て2014年4月、駿希くん(5)を産出した。

すぐに保育園を探し始めた。一緒に過ごしたい気持ちはあったが、仕事に復帰もしたかった。夫の明彦さん(38)が会社をやめ、弁護士をめざして法科大学院で勉強中という事情もあった。

30力所近く応募した保育園は全滅。それでも一時保育と母の助けを借り、出産から1年後に職場に復帰した。その後の2年は育児と

の両立であったと言う間に過ぎた。

気付いたら35歳。自分が一人の子で、きょうだいに強い憧れがあった。再び、市内の不妊治療専門医院「園田桃代ARTクリニック」に通い始めた。

仕事を続けられる範囲で治療を決めていた。社会科講師は高校時代から憧れ、10年以上続けてきた大事な仕事。やめたら、自分が自分でなくなる気がしていた。受精卵の移植は、週末や長期休暇期間を使った。そこから逆算し、ホルモン剤で子宮内膜の状態

「もう一人」苦しみ、断念

不妊治療③

を整えていく。移植の月は、休日に最適な移植日が来るよう、何度も医院の看護師と連絡をとった。

それでも、生理現象はコントロールしにくい。急ぎよ、平日出勤を遅らせなければならぬこともあった。両立させると決めたのに、結局は仕事も治療も中途半端な気がして、悔しくて看護師との面談で泣いた。

前回の治療の際、凍結した受精卵が三つ残っていた。順に移植したが、妊娠には至らなかった。再び採卵して三つの受精卵を凍結し

たが、その移植も2回連続してうまくいかなかった。



木下優里さん(右)と、治療を支えてくれた看護師の佐々木真紀さん(大阪府豊中市)

今年1月、残り一つを移植。その日、家で明彦さんと話しあった。「もしまたダメだったら、どうする?」。思えば、5年ほどを治療に費やした計算になる。かかった費用は200万円超。出口の見えないトンネルのようで苦しくもあった。「やるだけやったんちゃうか」。明彦さんの言葉に、心がずんとした。

移植結果が出る日は、夫婦で医院に行った。妊娠には至らなかった。次の採卵をするか尋ねられ、2人で出した結論を伝えた。「治療を終える」。いまがやめどき、と思えた。

(水戸部八美)

■ご意見・体験は、氏名と連絡先を明記のうえ、iryoy-k@asahi.comへお寄せください。



apital

「患者を生きる」は、医療サイト・アピタル (<http://www.asahi.com/apital/>) でも、ご覧になれます。